

三浦哲郎

曉

あけ

闇

あん

海

うみ



曉
月
海

暁闇ぎょうあんの海 奥付

昭和五十八年六月十日 第一刷

定価 一一〇〇円

著者 三浦哲郎みうらてつろう

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号 一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二二一

印刷 精興社 製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次 きょうあん
〈暁闇の海〉

暁闇の海 5

北の砦 91

海村異聞 171

装幀・題字
斎藤隆

暁闇の海

三浦哲郎

暁闇の海

一

明治二年三月二十二日の夜明け方、奥州八戸藩はちのへの鮫浦さめうらにあるお台場の見張番が、浜から二十丁ほどの沖合に、いつの間に何処からきたのか黒船が三艘、舷よなべりを寄せ合うようにして浮かんでいるのを見つけて、動顯した。

いずれも異国の建造になる軍艦とおぼしい黒船で、三艘のうち一艘はひとときわ大きく、三本帆柱に煙出しが二本、他の二艘は二本帆柱で煙出しはそれぞれ一本宛ついている。

鮫浦は三陸沿岸屈指の港だが、夜が明けてみると、嵐でもないのに黒船が三艘も人知れず碇泊しているなどというのは、これまでいちどもなかったことだ。しかも、それがどこの国の艦隊なのかわからない。また、なにが目的で夜のうちから、浜を睨むようにおなじところにじっと浮かんでいるのか、それも腑に落ちないことである。怪しい黒船としかいいようがない。

見張番は、お台場の坂道を転げるように駆け降りて、浜の御陣屋に注進した。御陣屋でも、朝寝の夢を破られて大いに驚き、さっそく二里離れたお城へ早馬を出した。それから浜中が騒ぎになった。

海から目が昇ると、黒船のほかに、小舟が一艘、ちょうど黒船と浜の中間あたりに浮かんでいることがわかった。これまた、進むでもなく退くでもなく、おなじところにゆらゆら浮かんでいるかに見えたが、よく見ていると、ほんのすこしずつ位置を変えていることがわかった。それにしても、やはり進むでもなく退くでもなく、ただ波のまにまに漂っているかのような位置の変え方である。

潮に押し流されないとところを見ると、誰か人が乗っているのだろうが、なにをしているものやら皆目見当がつかない。黒船といい、その小舟といい、気味の悪いことおびただしい。

浜では、他国の船が入ってくると、それが廻船のときは当番の船問屋が、廻船以外の船のときは船名主が、小舟で乗りつけていって用向きを帳面に書き留めてくる。ところが、相手は正体不明の黒船だから、どうしたものかと相談しているところへ、御陣屋から使いがきて、普段のごとく何食わぬ顔で様子を窺ってこいという催促である。

普段のごとくといわれても、相手が黒船では勝手が違うが、名主として公務を預かっているからには後込みしんどもできない。それで、船名主の漣平のほか、船問屋の甚太郎、おなじく山四郎の両名が、与租吉という屈強な船頭が櫓をとる丸木舟で無気味な朝の海へ漕ぎ出していった。

この四人のうち、運が悪かったのは山四郎で、彼は当番でもなんでもなかったのだが、みんなで沖に漂っている小舟を見守っていたとき、つい、

「おお、あれはバッテリーラのう。」

と口を滑らせたばかりに、その物識りが心強いと、思わぬ道連れにされてしまった。

実際、彼は若いころ樽廻船に乗り組んでいたことがあって、世間の見聞が広く、浜では物識り山四郎で通っている。つい先年も、所用で江戸へ上った際に品川で朝陽丸という幕府の軍艦を見てきている。バッテリーラというのもその折の知識だが、べつに知ったかぶりをするつもりなどなかったのに、小舟の両脇でちかりちかりと光るのは濡れた櫓かに陽が滑るのだと気がついたとき、手拍子に、バッテリーラという言葉が口を突いて出てしまったのである。仕方ないこ

とであった。

与租吉は物怖じしない男で、丸木舟はみるみるバッテリーに近づいた。バッテリーには、紺木綿の筒袖に胴服のようなものを着た水夫らしいのが数人と、若い武家が一人乗っていた。武家は勿論、水夫たちも見たところ異人のようでもなくて、そのうちの一人は、大急ぎで海中からなにかを手繰り上げるような仕種しぐさをしていた。

与租吉が櫓を休めると、船名主の漣平が会釈をしていった。

「私、この浦の船名主でござります。つきましては、少々お尋ね申しますが、いずれからお出ででござりゃんしょうか。」

「わしらか。」と、バッテリーの武家が白い歯を見せていった。「わしらは青森港から出船して宮古へいく途中でな。この浦を借りて一と息入れているところじゃ。」

「して、いずれ様の御人数でござりゃんしょうか。」

漣平が重ねてそう尋ねると、武家はまた白い歯を見せて頷きながら、

「さよう、味方の船じゃ。」

といった。漣平は、武家が聞き違えたのかと思って、おなじことを重ねて問うたが、やはり武家は頷きながら、

「さよう、味方の船じゃ。」

と、おなじ返事を繰り返した。

敵か味方かと尋ねているのではないのに、相手は味方だ、味方だとばかりいつている。丸木舟の三人は、互いに顔を見合わせた。おなじことを三度尋ねるのは勇気の要ることであった。

すると、武家の方からこういった。

「味方なら、なにも心配には及ぶまい。いずれ世話になることがあるかもしれないぬ。お役目、御苦労。」

そういつたかと思うと、櫂を持つ水夫たちに気合を入れてさっさと黒船の方へ漕ぎ戻っていた。

丸木舟の三人は、なにやら釈然とせぬまま帰途についた。

「それにしても、よく似てるなあ。」と、山四郎は沖の方を振り返っていった。「あの黒船、品川でみた朝陽丸にそっくりだじゃ。」

それで、ほかの二人も朝日に小手をかざして沖を振り返ってみた。三艘の黒船は、いつの間にか蒸気を焚きはじめたらしく、都合四本の煙出しから薄い黒煙が晴れ渡った朝空にまっすぐ立ち昇っていた。

あんな黒船さえこなければ、いい日和の朝だったのだ。

「どれが朝陽丸にそっくりだってせ。でっかいのか、こまいのか。」

と漣平が訊いた。

「どれだったって、こうして見ると、どれもおんなじに見えるなあ。まるで朝陽丸が三艘並んでみたいじゃ。」

と山四郎はいった。

それは無理もないことで、かつて幕府が外国から買い入れた軍艦は、大小の差はあってもどれも似たような形をしていた。帆柱は二本か三本、煙出しは一本か二本、大砲は船の大きさによって六門から十二門積んでいる。遠目に見ただけで艦の名をいい当てるのはむずかしい。

「だども、もしあの三艘のなかに、その朝陽丸とやらが混じっているものとすれば、これはどういうことになるべかのう。」

漣平が腕組みをしながらそういったが、それには誰も答えられなかった。なにしろ、山四郎が品川で朝陽丸を見たのは、いまからもう五年も前の話で、この五年の間に、世の中が大きく変わってしまったのである。山四郎が見たころは、朝陽丸はまだ幕府の軍艦だったが、いまは幕府が崩れてしまって朝廷の世の中になっている。

ところが、そんならかつての幕府の軍艦は残らずいまは官軍のものになっているのかといえば、そうとは限らない。聞くところによると、かつて幕府の海軍奉行だった榎本武揚が艦船八艘を率いて品川を脱走し、蝦夷地へ渡って箱館の五稜郭に立て籠った由である。それが去年の

八月のこと、それ以来、山口、津、久留米、徳山、岡山、備後福山、越前大野などの諸藩から派遣された榎本軍討伐の官軍が、ぞくぞくと青森に集結していて、その総数七千余、ために津輕藩では、寒さに弱い南国兵に防寒具を支給するため野犬狩りに大童^{おおわらわ}だと聞いている。

あの三艘の黒船は、官軍の御船であるかもしれないし、あるいはまた榎本艦隊の片割れかもしれないのである。

ともかく三人は浜へ戻ると、早速御陣屋に向いて報告に及んだが、御陣屋では、ただ味方の御船の由にござりますという報告だけでは、不満げであった。なにを訊いても味方だ味方だの一点張りというのは、なにやら胡散臭^{ごさんくさい}いし、薄気味が悪い。

そのころ、八戸藩では、奥羽鎮撫総督府の強圧的な遣り口に抵抗して、奥羽二十七藩で結成された奥羽列藩同盟に加わる一方、蝦夷討伐のために北上してくる官軍にはむしろ協力的な態度を示したりして、見方によっては日和見とも優柔不断とも受け取られかねない立場をとっていた。それというのも、八戸藩主の南部信順は二十五代薩摩藩主島津重豪の五男で、いずれは錦の御旗を戴くにしても、なにしろ南部盛岡藩の支藩でわずか二万石の小藩にすぎないから、盛岡藩への遠慮もあり、また、いたずらに旗幟を鮮明にすれば忽ち周囲の雄藩に押し潰されるおそれもある、もっぱら時間稼ぎに、どっちつかずの立場を守っていたのである。

けれども、そういう藩の本心を容易に他藩の者が知るわけがない。従って、海からきていき

なり味方だという輩など、かえって胡散臭くて、薄気味悪いばかりなのである。

御陣屋では、沖から戻ったばかりの村役たちに、ただ味方だという返事だけでは納得がいかぬ、再度出向いて、いずれ様の御人数か、しかと承てくるようにと言いつけた。

一一

よんどころなく、三人はまた丸木舟に乗り込んで沖へ漕ぎ出していった。海の上にはもはやバッテリーの影もなく、黒船のうちの二艘はゆっくりと沖の方へ遠ざかりつつあった。船名主の漣平が、舌打ちしていった。

「あれを見さい、黒船が沖へ出ていくぞい。味方じゃというて、一服すれば出ていく船を、なんでわしらは追いかけて身許を訊かねばなんね？　御陣屋の方々もよっぽど苦勞性せのう。」

ここが海の上だからそんなことがいえるのだが、他の二人もそれには同感であった。ところが、そのとき船頭の与租吉が妙なことをいい出した。

「したれども、味方の御船が、なんでまた海の深さを測ったりなんぞするんでやんしょう